



TITLE:

金の意義に就いて「金數量説への一批判」

AUTHOR(S):

松岡, 孝兒

CITATION:

松岡, 孝兒. 金の意義に就いて「金數量説への一批判」. 經濟論叢 1933, 37(4): 541-561

ISSUE DATE:

1933-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130361>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 四 第

卷七十三第

行發日一月十年八和昭

論 叢

貨幣效用の測定について

文學博士 高田 保馬

企業と租税負擔

經濟學博士 汐見 三郎

市民主義・國家主義・國民主義

經濟學博士 石川 興二

時 論

地租改造の一案

法學博士 神戸 正雄

研 究

資本蓄積と資本機的構成變化

經濟學士 柴 田 敬

金の意義に就いて

經濟學士 松岡 孝兒

出張販賣より見たる百貨店對小賣店の抗爭

經濟學士 堀 新一

說 苑

企業の豫算期間について

經濟學士 山本安次郎

販賣組合における價格の決定方法

經濟學士 吉 木 信

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

金の意義に就いて

「金數量説への一批判」

松岡孝兒

一、序言

金と一般物價との間に如何なる關係があるか？といふ問題は、既に久しき以前から景氣の變動が注目されるに於いて論議されて來た點であり、特に前世紀の四十年代にカリフォルニアの金鑛が発見されて以來は、資本主義制經濟の發展に伴ひ、次第に明瞭となつてきた景氣の消長につれて、それは常に經濟學特に金融論上の花形問題となつて來た。最近世界大戰後に於いては、一九二〇年のブラッセル會議及び一九二二年のジュネヴ會議の必然的歸結として、一九二九年夏、國際聯盟財政委員會が、特に金委員會を任命して、「金購買力の變動原因、並に其の各國民の經濟生活への影響を吟味し、以つて此等問題に關する報告を企圖し¹⁾」て以來、此の金と一般物價水準との問題は、再び世界金融論壇上に花々しく登場し來り、幾多の研究乃至論争はこれをめぐつて或は實際上より、或は理論上より行はれるに至つた。

私は已に屢々この問題をば、或はその實際方面から或はその理論方面から取扱ひ、またその所

1) Société des Nations: Rapport de la Délégation de l'or du Comité financier, 1932, p. 4.

見も已に數次に亘つて之を述べた。²⁾ 此等の點に關しては私は今ここに特に再び之を繰返さうとは思はない。唯ここに一言したいことは、謂はゆる金數量説の構成要素たるこの金と一般物價水準との關係の重要性についてである。

凡そ金と一般物價水準との關係を如何に見るかといふことは、金と一般物價水準に關するあらゆる問題に於いて必ずあらはれ來る論點であり、かくてこの意味に於いて謂ふ金數量説なるものの考へ方は、少くもこの金と一般物價水準との關係を問題とするかぎり、前述金委員會の企圖する多くの目的に於ける現象形態を支配するところの理論であることは極めて明瞭であり、然らざるも少くも現象形態の背後にひそんで、常に現象形態を左右し、且つ培養するところの豐饒なる理論の温床であると考へられてゐる。³⁾ 此の意味に於いて金と一般物價水準との關係を如何に見るか?といふ問題をば、まづ謂ふところの金數量説を中心として考察をめぐらすことは、金と一般物價水準なる問題を核心的に把握し得る所以であると考へていいと信する。これここにこの問題を提出した所以である。

だからと云つて勿論私は、この金融論上に於ける迷宮的な問題が、今直ちにここで全面的に解決されるといふやうなことは信じてゐないし、また解決しやうとも思ふものではない。唯私の意圖は此の問題の所在が如何なる點にあるか? この迷宮的問題への把握は如何なる關係に於いてなさるべきであるか? といふことを述べんとする外他意ない。かくて私の所見は先づ問題の出

2) 拙稿：金をめぐる英佛の論争(經營と經濟第1卷第6號 pp. 821-831); ——：金問題批判(經濟論叢、第33卷第2號 pp. 148-156); ——：金問題と國際聯盟(經營と經濟、第2卷第5號 pp. 631-641); ——：金數量説に就いて(經濟論叢第33卷第4-5號、pp. 79-93, pp. 111-122); ——：金數量説の發展に就いて(經濟論叢、第35卷第1號 pp. 88-104)

發點として、金數量説に於いて金を以つて貨幣なりとする見方に始まる。私は更に金を以つて商品なりとする見方を説き、最後に金を以つて貨幣商品なりとする見方に論及するであらう。

二、問題の出發點——金數量説の見方——金を以つて貨幣なりとする見方

ここに提出せんとする問題は、金數量説について、金と一般物價水準との關係は、如何に把握さるべきであるかといふにある。かくて私は、金と一般物價水準との關係の見方に於いて、金數量説をばこの點について重要視する立場をとる。その理由については前述せる通りである。

勿論私は、金と一般物價水準との關係を見るに於いて、此くの如き立場のみが認めらるべき唯一のものであると謂ふのではない。然るにも拘らず、私が特にここに金數量説を出發點とせるは、今日やゝもすればこの學説を以つて一の謂はゆる「神聖なるもの」と考へる傾向があるからである。従つて此の學説を出發點として其の批判を行ふことが實際的だと信じたからである。

元來金數量説を中心とする此の種の金と一般物價水準とに關する論争は、金生産の増減ある場合、これを一般物價水準の側に於ける變化との關係について、因果關係を求めんとする夫々の考への相違が根本となつて起つたものである。従つて、此の種問題の根本的解決の基準は、實にこの見方への夫々の立場が如何なるものであるか？といふことに依存してゐると考へられる。換言すれば此の問題への見方の如何が此の種一般の諸問題にそのとるべき指針を與へるものである。

3) Nogaro: La question de l'or devant la Société des Nations (Revue d'économie politique, 45e Année, No. 1. pp. 14-16)

4) 本文、pp. 1-2.

といふことができる。

かくて私は、今この問題については更に次の一點だけを附加へる。それはこの見方に於いて、私がとらうとする立場は、此等兩者の關係の把握をば實際上の問題から出發せしめんとするものであり、抽象的觀念的な見方には従はないといふことである。

上述せるが如き意味からして問題展開の便宜上、私はまづ謂はゆる金數量說の見方の要領を述べる。が、もちろん、私が之に於いて企圖するところは、金數量說の構成要素中、特に金なるものが、ここに提出された問題の性質よりして、如何に把握さるべきであるか？ といふ點に止まる。元來謂はゆる金數量說なるものは、——已に多くの機會に述べたところであるが、重ねて繰返せば、——金分量と一般物價水準との關係に於いて、金分量の側に於ける變化が、金の流通速度にして一定せる限り、一般物價水準を決定するといふことである。そしてここに一般物價水準と對立する金なるものは、商品たる金又は貨幣商品たる金の意味ではなく、それは貨幣たる金であり、其の限りに於いて金分量は貨幣分量の代表者であるとするものである。かくて金分量は、この問題に於ける限り、貨幣分量の同義語として解せられ得る。従つて金數量說は貨幣數量說と同一系統に立つものであり、或はむしろ金と一般物價水準との關係を見んとする限り、貨幣數量說の換骨奪胎者であると云ひ得られる。

金數量說の見方の發展の根據は、一にかくの如き金に對する見方より出發する。その金分量

5) 拙稿：金數量說に就いて（經濟論叢、第33卷第4-5號 pp. 79-93, pp. 111-129）；——：金數量說の發展に就いて（經濟論叢、第35卷第1號 pp. 88-104）。參照

が、貨幣分量の代表者たる限り、金數量説的見方は流通的立場に於いて、金と一般物價水準との關係を見んとするものであり、この主張こそはまた従つて必然的にこの構成要素の見方についても、金即ち貨幣金としての觀念としてあらはれ來らざるを得ない⁶⁾。

ここに於いて最も注意すべきものは、金なるものの金數量説構成要素に於ける意味である。換言すれば金數量説の構成要素たる金分量なるものに於ける考へ方の發展である⁷⁾。

惟ふに最も素朴的な形態に於いて考へられた金分量は金産額それ自體であらう。併し、實際上より見れば、金産額の總體なるものが實質的に流通部面にあらはれることはない。また流通部面に於ける限り、かくの如き見方は問題とはならない。更に具體的に謂へば、金生産額なるものに於いては、先づ工業用金、退藏金が問題となる。或は工業用金の如きは金價格の騰貴につれ、常に流通部面にあらはれ來るといふ見方もあるが、金工業に於いては屢々少からぬ加工費を要してゐるから、其の點は考へなければならぬ。また退藏金といつても、裝飾品其他の意味に於けるものはともかく、謂はゆる印度、埃及、支那等に於ける退藏金は、あたかも未だ採掘されない金鑛に横はる處女金にも比すべきものであつて、謂ふところの貨幣金の如く流通部面への出入は容易でない。

かくて金分量なるものの意義は、金數量説的見方の發展に於ける限り、必然的に貨幣分量を意味することとなる。ここにこの理論上に於ける見方の發展が、自らこの見方の弱點を含むに至る

6) 拙稿：金數量説に就いて(經濟論叢、第33卷第4號 pp. 87-91)参照
7) 拙稿：上掲論文、pp. 87-104.

ことを示してゐる。

このことは生産された金について述べたものであるが、對外取引の結果、流入し來る金又は流出し去る金に對しては、それは元來中央銀行に於ける發行準備にあてられ、又はあてられてゐたものとして、其の金分量が直ちに貨幣分量を指すことは勿論である。

更に附言的に云へば、一般物價水準についても、之をば或は流通的に見るものと、或は生産的に見るとによつて、その構成要素としての意味を異にすべきであることは、容易に考へられるところである。此の問題がこの視角に於いて從來あまり論ぜられたるを聞かない。尤もサウエルベック指數の如きは確かに流通中心的な指數としての金數量説的要素と考へられはするが、

なほまた殘されたものとして流通速度がある。流通速度に關しては一般には問題の複雑性を避けて常に一定と假定されてゐる。併し、批判的立場からは屢々論議される點である。⁹⁾今ここでは立入らない。

最後に一言斷つて置くべきことは、金數量説が貨幣數量説の化身であるとする時に於いて、金の背後には謂はゆる貨幣の分量のみならず、更に廣義に信用貨幣に關する考察も存在してゐるといふことである。この問題については既に金數量説の發展についてのべた通りである。¹⁰⁾敢えて再言しない。

此等金、一般物價水準又は流通速度の如き、この種構成諸要素の個別的研究は、更に此等諸要

8) 拙稿：上掲論文、pp. 91-93.

9) 拙稿：上掲論文(經濟論叢、第33卷第5號 p. 110)

10) 拙稿：金數量説の發展に就いて(經濟論叢、第35卷第1號 pp. 94-98)

素が結合され、その結合の全一體が其の作用態に於いて如何に把握されるか？ といふ點を對象とするに於いて、一層問題をば展開せしめざるを得ない。今概言的に謂へば、この展開の要旨は、金生産の變化なるものは、一般物價水準に對して同時に且つ一般的に影響するといふことに歸着する。繰返して論じやう。

總じて金數量說の見方と謂はれるものの作用態を吟味すると、金の變化は一般物價水準に對して、同時に且つ一般的に影響すると考へられてゐる。従つてこの見方に於いては、金即ち金分量と一般物價水準との作用態に於ける關係は、金分量が貨幣分量の代表者として、一般物價水準に對し同時に且つ一般的に影響すると考へるものである。

要するに金數量說なるものは、既に述べたるが如く、謂はゆる貨幣數量說なるものと同一系統にたつ表現である。従つて、私が更に以下論ぜんとする金と一般物價水準との作用態に於ける結合關係の限りに就いての金數量說の内容なるものも亦、貨幣數量說の内容と同一系統にたつ。

かくして等しく數量說の立場による限り、貨幣數量說に於いては、貨幣分量が一般物價水準を決定すると謂ひ、また金數量說に於いては、金分量が一般物價水準を決定すると謂ふ。従つて後の場合に屢說せる如く、金分量は金分量即ち貨幣分量なる考へ方を通じて一般物價水準を決定すると謂ふの意味に解すべく、換言すれば金分量が直接に貨幣分量と相通するものなるが故に、又は間接に貨幣分量を代表し得るものなるが故に、其の限りに於いて、一般物價水準は金分量によ

つて決定されるといふ意味である。一般物價水準が金分量によつて決定されるといふことは、だからこの考へ方による限り、金分量がすくなくも貨幣分量の代表者であると見做さなければならぬ。

今かくの如き意味の數量說によるときは、貨幣分量は一定時に於いて取引數量と對立せしめられ、そこに物價の高さが決定される。かくの如き作用態の限りに於ける考へ方では、貨幣は價值なくして流通部面に入り來り、商品も亦價格なくして流通部面に入り來つて、然る後商品總量の一部と金分量の一部とが交換され、金分量の變化即ち貨幣分量の變化が一般物價水準に向つて、同時に且つ一般的に影響すると考へるものである。

併しながら、資本主義制經濟社會に於いて、一般物價水準に影響する金需要の増加は、常に資本關係従つてはまた利潤關係に依つて結合される兩者の作用態を通じてのみ理解される。單に金分量の増加を以つて貨幣分量の増加となし、それが直ちに商品に對する需要をつくと見るが如きは、全く資本主義制經濟社會に於ける金の、従つては貨幣の作用に對する理解を示すものではない。資本主義制經濟社會に於いては、資本家が資本を通じて利潤を追及する過程に於いて、始めて金、従つて貨幣は眞の購買力として動く。

かくて金分量又は貨幣分量、或は一般物價水準の内容に關して如何に詳細なる分析が行はれやうとも、上述せる金數量說的見方の限りに於いては、その構成要素の作用態に於ける相互的關係

の把握は、上述せる意味に於いて無機的であるといふことは之を否定し得ない。

尙斷るまでもないと信するが、かくの如き數量說の見方の問題となるのは、勿論金本位の限りに於いてである。不換紙幣本位または自由鑄造の禁止された金本位の如き場合に對しては妥當しない。¹¹⁾蓋し上述せる如き價值章標の流通、即ち紙幣本位の流通に於いては、貨幣に關する流通法則は逆である。本來金なるものが流通するのは金が價值を有するからである。然るに紙幣本位の場合は、その價值は流通によつて生ずる。金の流通分量なるものは、商品交換價值の一定せるときは、自ら金價值によつて決定するけれども、紙幣價值なるものに至つては、専ら紙幣の流通分量の如何による。ゆゑに金の流通分量は、商品價格の騰落するに従つて増減するが、商品の價格は紙幣の流通分量の多少に従つて騰落する。だからこれによると謂はゆる數量說の妥當限界は、紙幣流通に關する限りに於いてのみである。従つて數量說により、あらゆる場合を通じ、貨幣分量と一般物價水準、従つては金分量と一般物價水準とを規定する法則なりとすることは不當である。これ全く貨幣の機能をば専ら流通手段としての方面より考察したものであつて、價值退藏手段又は支拂手段としてその機能を考慮せざるによるものである。

以上の通り、金數量說をば、貨幣數量說の見方より論じたる限りに於いては、己に述べたるが如く、金分量が貨幣數量を通じて直接且つ一般的に、一般物價水準に影響するといふ點に歸着するが、なほこの貨幣數量說については、その立場の分類により、その主張は必ずしも之のみに限

11) Varga: 金生産と物價騰貴(笠信太郎譯: 金と物價 P. 4)

るものではない。¹²⁾ 唯私は上述せる如く實際問題即ち金委員會の中心問題としての數量説をとりあげたので、ここには其の他の點にはふれないで、専ら上述せる如き相に於ける數量説をば對象としたのである。

三、金を以つて商品なりとする見方

然るに之に反し、金を以つて商品なりと解する立場をとるときは、金生産に於ける變化は、また他の一般商品生産に於ける變化と同一の作用を示すものと解せられる。従つて、一般物價水準に對する作用は、金生産部門に於ける金たる商品生産の變化の程度に於いて影響する。¹³⁾ 故に金商品の生産部面に於ける變化は、之を以つて直ちに金數量說の場合の如く、一般物價水準構成要素の變化として、貨幣金分量が貨幣分量を通じて一般物價水準の上に同時に、且つ一般的に、影響すると見るが如き立場は考へられない。かくの如く金を以つて商品なりとする意味に於いては、金は其他の商品と同じく、本來商品として價值を有するものと考へられ、貨幣分量とは無關係である。寧ろ商品側に於ける事情が、流通上必要とする貨幣分量を決定するといふ見方である。¹⁴⁾

然らば商品たる金に於ける變化は如何にして一般物價水準に影響するか？

此の場合、金生産の變化が一般物價水準に對して結合される事情は、金數量說に於けるが如く同時に、且つ一般的にではなく、寧ろ反對に逐次に、且つ部分的に作用するものであると見られる。

12) 神戸博士：貨幣數量說に関する諸説（理論經濟 pp. 167-197）；高田博士：經濟學新講第三卷（貨幣の理論）pp. 296-297；Kirmaier：Quantitäts theorie, S. 34.

13) Bauer：金生産と物價騰貴（笠信太郎譯：金と物價 pp. 123-125）

14) Nogaro：La question de l'or devant la Société des Nations (Revue d'économie politique 45e Année, No. 1. p. 34)；Bauer：op. cit. pp. 123-125.

前者を強ひて流通中心の見方と謂へば、或は生産中心の見方であるといひ得られるものである。¹⁵⁾
然らば其の過程は如何？

今此等の點に於ける道行をのべるに先立ち、結論的に之を要約すると、先づ第一段階には、資本主義制經濟社會にとつての社會的生產部門に於ける生産費の變化は、各種生産部門に於ける資本の分配を變更し、第二段階には、このため商品市場に於いて需要と供給との間に變化が起り、例へばその生産費の低下せる生産部門内に於いては、供給の増加が促進せられ、そは相對的に他のすべての生産部門内に於いてその供給を緩慢ならしめる。反對の場合は、事情はその反對である。かくて最後に第三段階には其の結果として、例へば生産費の低下せる生産部門の商品價格が下落することとなり、更にこの事情はあらゆる他の生産部門に波及して、ここに一般物價水準の下落を生ぜしめることとなる。反對の場合は其の結果はまたその反對である。¹⁶⁾

以下金と一般物價水準との關係を問題とする限り、特に商品生産としての金を例として説明する。例へば總生産費が一千萬圓に達する一金礦ありとし、經營者はこの金生産に於いて一千百萬圓の金を獲得するとする。この場合この金山に於ける利潤率は一〇パーセントである。

今一般社會に於ける平均利潤率も亦一〇パーセントであるとする場合、更に他にこの金礦よりもなほ多額の生産をなす金礦ありと假定する。かくの如き金礦は前の金礦に對して謂へば、一の差額地代を有つと考へられる。かくの如き際、金礦の探掘者及び所有者が同一人格に非ざるとき

15) Senior: Three Lectures on the Value of Money, p. 101.; Mill, J. S.: Principles of Political Economy, p. 499.

16) Bauer: op. cit. p. 133.

は、ここに生ずるその差額地代は金鑛所有者の所有に歸し、金鑛採掘者は専ら一〇パーセントの平均利潤を獲得するのみである。

これに反して、總生産費一千萬圓に對し、生産額が一千百萬圓に達せざる金鑛所有者の經營は、原則として不可能である。何となれば他の總ての生産部門に於いて一〇パーセントの利益を獲得し得るに當り、原則的に謂つて特に金鑛なりと云つても、それ以下の利潤にもかゝらず經營することは、資本主義的原則の限り、その認められざるところだからである。

かくの如き場合、もし生産費が低下し、これによつて同じ一千萬圓の總生産費に於いて、一千二百萬圓の金が生産されると假定せば、此の場合この金鑛に於ける利潤率は、一躍一〇パーセントより二〇パーセントに増加し、金鑛の經營は、平均利潤率以上の利潤獲得を可能ならしめるに至る。

この意味に於ける利潤増加(以下之に準ず)は、かくの如き金鑛に對して必然的に新資本を導入する。從來、金鑛にして一〇パーセントの利潤が獲得されるものは經營されてゐたが、この利潤率より小なる利潤をあげる金鑛に對しては、金生産に於ける經營は原則的には行はれなかつた。従つて此の場合蓄積資本は、金鑛經營には用ひられず、常に他のより有利なる生産部門へと流れてゐた。今や此の意味に於ける資本は、金企業に於ける利潤増加の發生によつて新に金企業へ投下されるに至る。即ち銀行は金企業に對して資本を投下し、株式市場は喜んで金企業に於ける株

式を引受ける。かくして金企業に於ける利潤増加により、個々の生産部門への社會的資本の分配が變更されることになる。かくて起る問題は、一の金生産部門の事情に於いて變更された社會的資本の分配が、他の商品生産部門に於いて如何に行はれ、それが商品價格に對して如何に作用するか？ といふことにある。

此の場合先づ注目さるべき方面は、そが他の商品需要を増加せしめるといふことである。即ち利潤増加に伴ふ金企業への資本移動は、その金企業自體の生産手段並に金企業系統労働者の生活手段への需要を高め、更にこのことは、金鑛地方に於ける不在資本家即ち金鑛會社の株主並に金鑛關係銀行株主、最後に株式賣買業者の購買力を増加せしめるといふことである。

更に翻つて商品市場に於ける供給方面について見るときは、無論商品の供給は増加する。蓋し金企業の利潤の一部は蓄積され、生産擴張に投ぜられるからである。併し、この商品供給の増加は、金生産に於ける新生産手段にその資本が向けられるときは、その然らざるときよりも、緩慢である。その理由は、金生産の技術に於いて進歩が起らない場合に於いては、生産手段方面に投下される資本は、蓄積資本中の僅少の部分に過ぎず、このことは同時に蓄積資本の殆んど總てが他の商品の擴張生産に投下されることを意味するけれども、これに反して金生産に於ける新生産手段の採用は、新なる蓄積資本の一部をば當然これに利用せしめることになり、その他の生産部門に於ける利用は、その差額に對してのみ行はれることになるからである。

要するに、かくの如き過程に於いて見出される状態は、一般的に謂つて金企業に於ける技術的進歩が、一方、商品市場に於ける需要の増加を生ぜしめると共に、他方、商品市場に於ける供給の緩慢なる増加を惹き起すに過ぎないといふことであるが、結局これらの關係は商品價格を騰貴せしめ、これに伴つて利潤率を増加せしめることになる。

かくて商品に對する需要の増加、商品價格及び利潤率の増加は、更にその影響を擴大する。商品の賣行は圓滑となり、之による好景氣の波を利用される。すべての商品はその賣買が迅速に行はれ、従つて資本の回轉率は増加し、資本の循環期間は短縮される。従つてたとひ資本の分量が一定であるとしても、資本家はその生産を擴張することが出来る。即ち資本家は従前より多數の労働者を雇ひ、従前より多數の原料に加工することが出来る。かくて従前より多數の労働者を雇入れることの可能は、勞働市場に對する需要の増加であり、失業者の一部就職である。労働者の就職は自らそれだけその生活資料の需要を増加せしめ、かくて生活資料の價格は騰貴する。又従前より多量の原料に加工し得ることは、これによつて工業加工原料の需要を増加することになり、そはまたその價格をも騰貴せしめることになる。これによつて生活資料並に原料生産關係の生産部門に於ける景氣は動く。かくてここに於いても亦、生産の擴張が行はれ、そはまたこれに伴ふ原料及び生活資料への需要を増加せしめることとなり、かくしてすべての商品價格に於いて、その高騰傾向が更に強まる。

資本主義制經濟社會に於ける資本家は、かくの如き生産擴張に於いては、常に自己資本の利用に止らず、更に一般資本をも吸収せんとするに至るものであるが、凡そこれらの關係が堆積して、ここに一般物價水準なるものの騰貴が考へられる。逆の場合はまた概ね反對である。或はかくの如き金鑛業に於ける利潤率増加の結果は、單に金鑛業資本家の奢侈的需要を増加するに過ぎないとか、又は金鑛業資本家の獲得する利潤は、世界貿易に於ける商品總額に比して僅少であるといふが如き論者あるも、併しそれは資本主義制經濟社會に於ける産業各部門が、本質的に信用を通じて有機的關係に置かれてゐることを忘れたものであると云へる。此等の事情を通じて注意すべきことは、問題は流通關係に存せずして、生産關係に存するといふことである。商品價格の騰貴又は下落をば、流通貨幣の代表者たる金と、賣らるべき商品との關係から導くのではなくて、金生産たる一の商品生産部門に於ける變化が他の各種商品の生産部門へ及ぼす資本の分配から導くものである。¹⁷⁾それは金と一般物價水準との關係を數量説の如き無機機械的説明によるに非ずして、之をば有機的構成的説明に於いて捉へんとするものである。

此等の事情は、對外關係よりして一國に金が流入し、又は流出せるときに於いても、その金は己に商品として價值を有するものと解せられるが故に、それは寧ろ對外的には商品の流出又は流入の結果と考ふべく、従つて例へばかくの如き商品の流出は、其の金の流入國の特定價格が金の流出國に比し低い結果に外ならない(反對の場合は結果はその反對)。また流入せる金分量も直ちに

17) Varga: 金生産と物價騰貴(笠信太郎譯: 金と物價 pp. 21-22, p. 192.)

18) Varga: op. cit. p. 22.

19) Bauer: op. cit. pp. 123-125.

貨幣分量としてあらはれることなく、中央銀行の發行準備となるものであり、従つてその一般物價水準に及ぼす作用も、金分量が直ちに貨幣分量として現はれるものではなく、金の流入による準備率の増加、割引率の引下を通じて貸出資本の増加となつて、始めてそこに現はれるものであり、此の意味に於いて依然金と一般物價水準との關係は逐次的であり、部分的であると考ふべきである。

四、金を以つて貨幣商品なりとする見方

以上の如き立場に對して最後に考へられる立場は金は貨幣たると同時に商品であるとする立場である。この立場によれば、今日の資本主義制經濟社會に於いて、金は單なる商品ではない。それは價值の尺度たると共に價格の標準となる。金がこの意味に於いて貨幣たることは明かであるが、更に金はまた同時に今日の資本主義制經濟社會に於いて勞働の生産物として生産され、素材價值を有つものとして一の商品である。この故に金を以つて或は貨幣なりとし、或は商品なりとする見方は、金に關する限り、すべて一面的な見方であるといふことになり、金への理解は必然的に其の貨幣商品であるいふ點に於いて、其の全面的把握が成されたと考へらるべきである。

この意味に於いて、金は一の特種なる商品であるが、更に機能的に見ても、金は其の生産に應じて常に何時にても他の商品に交換され得るものである。(一應は產出された金は鑄貨又は兌換券に換へられ

るが、併しそれが金の價值を完全に代表する限り、金が地金のまゝ直接に商品と交換されるのと少しも變らない。此の點は他の商品と異なる。他の商品にあつては、其の生産者は先づ賣つて貨幣を手に入れなければ他の商品を買ふことはできない。然るに金の生産者はかくの如き迂回的方法によらずして、本來的に他の商品と交換することができる。これ金が他の商品と異り、本來貨幣たるの機能を有つてゐる特種なる商品とされる所以である。かく金は如何なる商品に對しても交換されるのみでなく、また價値の退藏手段とし蓄積されるが、また何時でも交換に用ひられる。ここに金は一般的なる富の所有の對象となり、無限の所有慾の對象となる。しかもそれは貨幣商品のみが有つ特性である。

金は此の意味に於ける特殊なる商品であるが、その生産に於ける變化は、それ自體及び他の商品生産部門に於ける影響を通じて、一般物價水準に影響すると共に、更に流通手段としても亦同様資本關係を通じて一般物價水準に其の影響を及ぼす。此の點については已に述べたところであり、今は再論をさける。唯金が商品たる一面を有つことについては異論がないとしても、其の如何なる種類の商品なるかについては從來必ずしも意見は一致して居らない。これに關しては二つの方面が考へられる。

第一は金も亦商品としては一般商品であるといふ見方である。この見方に従へば、金たる商品は、其の生産費を増加せずして、生産を増加し得るが如き種類の商品であると謂ふのである。²⁰⁾

第二は金は商品としては特殊商品であるとする見方である。それは例へば農産物の如き商品であ

つて、其の生産費は最も不利なる生産條件の下に於いて生産されるものによつて示され、しかも尙ほ其の需要を満す上に於いて之を必要とするが如き商品であると謂ふ。²¹⁾ 謂はゆる農産物の市場價格が、最も収益少く地代なき土地の生産費によつて決定されんとする傾向にあるといふも亦此の意味に外ならない。

第一の場合に於いては、商品價格は生産費の減少によつて低下するものである。第二の場合に於いては、第一の場合に對して屢々例外的な要素を含んでゐる。蓋し此の種の商品價格は、その最も不利なるものも一定の生産費によらなければならず、しかも之を必要とするが如き商品價格が標準價格となるものだからである。従つてもし其の間に於いて生産費に改善が行はれるに於いては、其の結果は唯相對的に有利なる關係に於いて生産されるものの利益を増加せしめるのみであつて、此くの如き事情こそはまた正に金生産に於ける事情であるといふのである。換言すれば金生産に於いては、恰も農産物の生産に於けると同様、最も不利なる條件の下に於いて生産される金が、その價格を決定するものであり、これより有利なるものは、そこに差額地代を獲得するものであるといふのである。

この意味に於いて、金の採鑛又は精鍊に際し、たとひ生産費を節約するが如き方法が採用されるときも、此の場合金の價格は、これがため他の商品價格に對して下落しない。この生産費改良の結果は、從來採掘されなかつた金鑛の採掘を可能ならしむるにすぎない。即ち金の生産費は

21) Varga: op. cit. p. 14 以下

低下したのであるから、それは必然的に金の生産費が前よりも低下せる生産費によつて生産し得るわけになるが、併し此の場合にも價格を決定する生産費、即ち最も不利なる條件の下に生産される金の生産費は依然として前と同一である。

この事實から認められることは、從來最も不利なる状態に置かれ、少しの差額地代をも生じなかつた金鑛に、今や差額地代が生ずるやうになつたこと、並に從來既に差額地代のあつた金鑛に於いては、その生産費の低下に應じて、その差額地代をば更に高めるやうになつたといふことである。

尤もかく云へばといつて、金の價格が下落するといふが如き場合が全然ないといふのではない。たとへば生産費の極端な減少によつて新に生産された金が、過剰となるが如き場合に於いては、金の價格は下落し、最も不利なる状態に於いて採掘されつつある金鑛の生産は中止されることになる。併しかくの如き事情は極めて稀にしか起らない。その歴史上の事實は何人も知つてゐる通りである。例へば、一八四八年のカリフォルニアの金鑛、一八八六年のトランスヴァールの金鑛、一八九六年のクロンダイクの金鑛、一八九七年のアラスカの金鑛等々の發見の際の如きこれである。

かくて金は一般商品としてよりも、むしろ農産物の如き特殊商品として理解することができ、金はその限りに於いて貨幣商品として認められるが、それは上述せる如き例外的な生産が行はれる

場合の外は、その最も不利なる金鑛に於ける生産費によつてその價格が決定される。

或は金の無限の需要は、中央銀行が一定價格を以つて金の買入を規定してゐるからであり、この意味よりして金の側に於ける事情は一般物價水準に對して無關係なりと主張する見方がある。²²⁾

併し、金を以て貨幣商品なりと解する限りに於いては、この金が貨幣商品たることは、中央銀行の買入價格の一定と無關係に、過剰生産の起らざるかぎり、その需要をば無限に生ぜしめるものではなからうか？ かの中央銀行が金の價格を一定してこれを買入れることは、それは各國民經濟が相互に獨立してゐる關係より起る便宜的なものであつて、金が價值の退藏者として重要視されることが、この買上なくしても、またはこの買上と獨立しても行はれたこと、または行はれてゐることを論證するものであり、かくの如き買上が、決して金の價格より惹起されるものとは考へられない。従つてかくの如き意味よりして、金の價格の一定、またその一般物價水準に及ぼす影響をば中央銀行による金の無限の需要によると主張して、金數量說の見方を否定し、以て之に對する反批判を試むることは問題ではなからうか？²³⁾

惟ふにかくの如き考へ方こそは、寧ろ數量說の見方の成立を認めるものであらう。蓋し、金の價格を其の中央銀行による買上價格によつて、決定せんとすることは、金の價值をその生産關係に於いて與へられる固有價值に於いて見ずして、それとは無關係に成立すると考へられるからである。

22) Hilferding: 貨幣と商品(笠信太郎譯: 金と物價 p. 39.)

23) Hilferding: 貨幣と商品(笠信太郎譯: 金と物價 p. 41.)

五、結 言

是に由つて之を觀れば、金の意義は今日一般的社會的の關心の對象となつてゐる金數量說的意義、即ち金を以つて貨幣金なりとする考へより出發して、金を以つて一の商品なりとする考へ方にまで其の考察を進め得るが、併し私見は此等兩者の何れにも與みすることはできない。金が今日の資本主義制經濟社會に於いて有つ意義は、最後の段階たる金を以つて貨幣商品とする見方まで達しなければならぬ。

寔にこれあるによつて、金は常に價值の測定手段としてのみならず、更にはまた價值の貯蓄手段、價值の支拂手段として其の存在は認識せられ、如何やうの現象形態に於ける錯綜があつても、常に資本主義制經濟社會の價值尺度、價格の標準として最後の鍵を握り、以つて其の存在理由を強調し得ると信ずるものである。